

要 旨

コーヒー農家の栽培 —ルワンダ農村におけるSAFA分析を基に—

藤田 寿乃

本稿はルワンダ共和国のコーヒー生産地を対象に、コーヒー農家のコーヒー栽培継続意志・継承意志とその要因の調査に基づいて、調査地におけるコーヒー生産の持続可能性を検討するものである。

ルワンダのコーヒー栽培は19世紀にドイツ宣教師によって導入されて以来の長い歴史を持ち、独立後も政府によって重要な輸出作物に位置づけられ、その後スペシャルティコーヒーの生産に力点が置かれている。今日、ルワンダのスペシャルティコーヒーは欧米諸国に限らず中東やアジアでも流通するようになった。このような国の政策やコーヒー産業の現状の中で、ルワンダのコーヒー生産の一つの中心地であるカレンゲセクター（地区）ではコーヒー農家とコーヒーの木の高齢化、若年層の離脱といった状況があり、地域におけるコーヒー生産の持続可能性に問題が発生していた。

この現状に対して、筆者はこの状況がコーヒー農家のコーヒー栽培継続・継承意志に起因しているとは仮定し、継続意志と継承意志の程度を明らかにすることで、コーヒー生産の将来を予測することとした。そして、その予測に対してコーヒー農家自身に加えて企業や消費者等の外部のアクターがどのように関わっていくことが可能なかを提示することを研究の目標とした。なお、コーヒー生産の将来を予測する要素としてコーヒー農家の栽培継続・継承意志を選択したのは、日本においては、耕作放棄地＝栽培不継続の要因に関する論考は多数あるが、ルワンダコーヒーに関してこの視点での研究は見当たらなかったためである。

ルワンダにおいては、農家が栽培するコーヒーの木に実った果実を収穫し、コーヒー企業が経営するCoffee Washing Station（CWS）に持ち込むことで、コーヒーの加工が始まる。農家はCWSからの支払いによってコーヒー栽培から収入を得ている。加工されたコーヒーの品質が高ければ輸出の可能性が高まり、輸出されたコーヒーがスペシャルティグレードであれば、例えばスペシャルティコーヒー関連の制度を通じて海外の企業から農家がサポートを受ける可能性も高まる。

従って、農家のコーヒー栽培に対する姿勢と農家とコーヒー企業との関係、そしてコーヒーの品質はコーヒー生産の将来を予測する上で切り離せない要素である。そのため本研究の分析では、農家の栽培継続・継承意志に加え、それに影響を及ぼす要素として農家の栽培技術や農家と企業の関係、コーヒーの品質も調査対象に加え、持続可能性の分析を行った。

分析には文献研究に加え、筆者自身が実施したルワンダ・カレンゲセクター（地区）における30人のコーヒー農家へのアンケート調査と110件のコーヒー圃場の観察調査、そしてルワンダ国内で実施したカップピング（コーヒーのテイスティング）によって収集したデータを用いた。

フィールドでのデータ収集は主にアンケート用紙を用いた質問調査により行った。アンケートには、コーヒーの栽培継続・継承に関する項目のほかに、先行研究を参考に性別や年齢などの回答者の属性に関するもの、栽培本数・栽培年数・収穫量等のコーヒー栽培に関するもの、CWSのサービスに関するものを質問内容として含めた。圃場での観察調査では主にコーヒーの木の管理状況や

栽培技術を確認した。

分析の枠組みとしてはFAOが提唱するSUSTAINABILITY ASSESSMENT OF FOOD AND AGRICULTURE SYSTEMS (SAFA) を用いた。SAFAは、食料および農業事業が環境と人々に与える影響を評価するためにFAOによって開発された枠組みで、良好なガバナンス、環境の完全性、経済的回復力、社会的ウェルビーイングという4つの側面から持続可能性を測定できる枠組みである。経済的な側面に限らず農家の意思に影響を及ぼす要素を判断できるため、本研究の分析の枠組みとして選定した。

カレンゲセクターで収集したデータからコーヒー生産の3工程（栽培、加工、評価）の持続可能性を測定したところ、栽培と加工の持続可能性が低く、課題があることが判明した。

アンケート調査から明らかになったことは、農家の全員がコーヒーの栽培を継続すると回答しているものの、30人中8人しかコーヒー栽培の継承を考えていないことである。この結果が示すのは、この先例えば5年はコーヒー農家の数はそれほど変動しないかもしれないが10年、20年経過したときに農家の数は半数以上減り、それに伴ってコーヒーの生産量が減少するという予測である。

栽培面については、インタビュー対象の農家のうち32%がコーヒー栽培により損失が発生しており、農家の57%が収入の半額以上の額を支出が占めていること、カレンゲセクターにおけるコーヒーの木1本あたりの収穫量の中央値が0.5kgとルワンダの平均収穫量の約半分であることから、栽培技術あるいは栽培に対するモチベーションが高くないことが予想された。

また加工工程、つまりコーヒー農家と企業の関係性については、コーヒーチェリーの買取価格と、肥料の配布サービスに課題があることが分かった。カッピングの結果からは、カレンゲセクターで生産・加工されているコーヒーの品質がスペシャルティコーヒーとして輸出できる品質であることが明らかになった。

この現状に対して、まず農家ができる取り組みとして、カレンゲセクターにおいてはほとんどの農家は組合などの農家グループに属しており、グループであることの利点を活かす方法を提案した。例えば、現在農業利益が出にくい原因となっているマルチング資材の確保についてグループや組合で一括購入し、一度に運搬することで運搬にかかっている費用を減額させるというような取り組みや、コーヒーチェリーの買取価格については、農家がグループとしてコーヒーの品質と生産量を上げ、CWSにチェリーを販売する際などの機会にグループで交渉をすれば、買取価格が上がる可能性があると考えられる。

加えて、企業が取り組める対策として、マルチングに活用されることが多い作物を栽培して資材を配布すること、あるいは農家へマルチング資材となりうる作物の栽培についても助言をするという方法がある。また、肥料の配布サービスについてはCWSが農家の所持するコーヒーの本数を正しく記録し、政府へ申請をする必要がある。そして、配布肥料が不足している場合には、有機肥料の使用を推進しその作り方を農家に指導するという方法を提案した。